様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６　月　１５　日現在

機関番号：12611
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19520203
研究課題名（和文）アメリカ演劇の理論と実践におけるリベラリズムと民主主義の問題：冷戦以降の再検討
研究課題名（英文）Reconsidering Cold War Cultural Politics: Problematics of Liberalism and Democracy in the Theory and Practice of Contemporary American Theatre

研究代表者　戸谷　陽子（TOTANI YOKO）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授
研究者番号：30261093

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後の現代アメリカ演劇に見られる政治化、脱政治化、個人主義、男性性の構築、上演および身体の政治性といった舞台芸術の諸問題を、ジェンダー、消費資本主義、国家言説等の文脈において、とくに民主主義とリベラリズムという観点から検証し、冷戦期の文化政策の再検討を試みるものである。

研究成果の概要（英文）：This project aims to examine the influence of the American Cold War cultural politics on contemporary American theatre and performance art. By addressing such issues as politicization, de-politicization, individualism, construction of masculinity, and politics of body, in the context of gender politics, introduction of consumer capitalism and nationalism in the Cold War era, it attempts to reconsider problematics of representation in relation to the notions of democracy and liberalism.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：アメリカ演劇、パフォーマンス研究、舞台芸術、アーサー・ミラー、テネシー・ウィリアムズ、リベラリズム、冷戦期以降の演劇、前衛演劇、パフォーマンス

１．研究開始当初の背景

報告者の研究課題は一貫して、20 世紀以降のアメリカ演劇・舞台芸術における表象と文化の問題を理論および実践の両面から、社会的・歴史的また今日的な文脈で捉え直す作業に主眼をおいたものであり、書かれたテクストの分析のみならず、実際の上演テクストを対象とすることにより、空間や時間、および身体の政治学の問題を含めた表象文化と社会との関わりを考察してきた。

とくに前衛舞台芸術に見られる意識の在りようとその変化を研究する過程で、60 年代を席捲した世界的な文化の大変動収束後、とりわけ 89 年の東西壁の崩壊と冷戦終結を境に再び大きな文化の変動があり、それにつれて前衛舞台芸術の意識のあり方も大きく変化したことが確認された。以降顕著になった舞台芸術におけるこの現象を、国家や公共機関が文化政策として規定する公共の概念や演劇実践者の意識を手がかりに文化ポリティクスの問題として研究した。グローバル資本主義システムと不可分となった芸術文化のありようは、国際演劇祭と前衛舞台芸術の関係に顕著であり、資本主義世界における前

衛舞台芸術の市場化について、さらに IT の発展にともなう演劇システム地図の変化によりもたらされた新たな国境往来図が身体のポリティクスとコミュニケーションに及ぼす影響について考察し、舞台芸術の市場商品化と同時に前衛の周縁化が促進される構造が、80 年代以降の資本主義先進国におけるネオ・リベラリズムの政治・経済政策と呼応・合致することを、ニューヨーク市および州当局の文化政策を例にとり「1990 年代ニューヨークの上演空間――ニューヨーク市・州当局の文化政策をめぐって」という論文において具体的に確認した。

この間、加速するグローバル資本主義を背景にさらに変化する世界情勢の中で、同時多発テロ事件以降、アメリカ軍のイラクおよびアフガニスタン侵攻にともない、新たに戦争と暴力が大きな問題として前景化されることとなり、これをテーマにした演劇やさまざまな形でのパフォーマンスもここ数年来、数多く発信されている。こうした上演を検証するうち、背景にあるリベラリズムの意識が複雑かつ微妙な差異をもつ多義的なものであり、アメリカにおけるリベラリズムや民主主義の概念について、歴史的に考察する必要性を認識するに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、20 世紀以降のアメリカ演劇および舞台芸術の理論と実践における、ポリティクスの諸問題についての研究の一環として、アメリカ演劇におけるリベラリズムと民主主義の概念の形成とその表象を、とくに冷戦期以降の国家体制が直接・間接的に演劇に与えた文脈を意識しつつ検証・再検討し、冷戦を経て 20 世紀末に顕在化したグローバリゼーションの問題と文化・表象芸術の関わりにおいて、舞台芸術論および現代アメリカ演劇史を見直すことにより、その固有の問題と相互の関り合いを考察し、20 世紀の歴史的文脈の中に位置づけ、今世紀の展開を標榜するための学術的指標を提示することにある。

３．研究の方法

（１）基礎研究：

文献研究を中心とした基礎研究を研究期間を通して行う。

（２）「政治的リベラリズムの演劇：マッカーシイズムとアメリカニズム」

おおむね平成 19 年度には上記テーマに沿って冷戦体制とマッカーシイズムおよび文化統制の歴史を辿る資料を収集し、基本的な概念を整理。また、A.ミラー、L.ヘルマン等、赤狩りの標的となり、社会派として知られる作家たちの作品を分析し、当時の社会における受容についても確認するために、劇評を収集・分析。これらの作品の上演レヴェルでの演出方法や意識、受容のあり方の変遷を確認するためにも、近年の公演についても同様に調査。

（３）「文化的リベラリズムの芸術家たち：前衛演劇とマイノリティ演劇」

平成 20 年度には上記テーマを中心に、いわゆる非政治的・美学的・前衛的とされる演劇人やマイノリティ演劇を標榜する演劇人（エドワード・オルビー、前衛演劇）の軌跡を辿り、彼らが推進した、美学的側面におけるリベラリズムを検証する。この過程で、19 年度に分析対象とした社会派の作家との差異を明らかにする。これにより近年のアメリカ演劇における表象の問題の可能性と限界をこれまでとは異なる視座から提示する。

（４）「民主主義と共同体の演劇：グローバルとローカル」

平成 21 年度には上記テーマを中心に、リベラルな主体を意識する共同体の演劇とこれらを構成する民主主義の概念を対象に分析。いわゆる 68 年世代が標榜した肉体を中心に据えた演劇や、コミュニティ演劇、ドキュメンタリ演劇の根底を流れていた意識に着目した調査・研究を行う。

（５）その他

①国内では入手が不可能な資料は、米国ニューヨーク市立図書館舞台芸術分館、コロンビア大学図書館、ニューヨーク大学パフォーマンス研究学科および大学図書館等で収集する他、過去の公演の映像を収集する。

②また、研究交流のある現地（おもにニューヨーク市内）の研究者および演劇人に助言を依頼し、積極的に交流の発展を図る。

③収集した資料をもとに懸案のテーマに関して、系譜を概観した後、資料の分析を行い、理論的裏づけを試みる。

４．研究成果

（１）基礎研究により、戦後アメリカの文化・芸術政策を戦後アメリカ芸術史に沿って仔細に検討することができた。自信と不安を併せ持つ戦後アメリカ社会の機運は、モダニズムと消費文化、ドメスティシティの礼賛や言論統制や検閲を同時に抱え込みつつ、そのままアメリカの文化生活内部に浸透していった。その中で、とくにアメリカ合衆国の冷戦期の芸術・文化政策が、共産主義＝女性性＝身体性、資本主義＝男性性＝知性といったイメージの流布を促進し、封じ込め政策による公共圏と親密圏の分断等、戦後冷戦体制の下で推進された二元論を強化した過程を確認した。その上で、冷戦構造が立脚する「自由主義陣営のアメリカ」というイデオロギーが、男性的なるイメージの流布による強いアメリカという国家言説の波及に資するものであったことも確認した。

（２）こうした戦後文化・芸術史を具体的に

検証し、意見交換をするために、2007 年アメリカ文学会東京支部のシンポジウム「冷戦下の表象文化空間再考―国家・ジェンダー・イデオロギー」を発題・企画・司会し、冷戦下の文学、視覚芸術、映像、演劇における国家言説、ジェンダー配置、イデオロギーの浸透をたどった。報告者は A.ミラーの作品、ジャクソン・ポロック等戦後アメリカの抽象表現主義美術作品や広告を分析し、主流のメディアにおける民主主義やリベラリズムを強調する言説および表象が、強い国家言説およびマスキュリニティの構築と呼応し、これらが強化される過程を検証した。

（３）2009 年日本英文学会年次大会では、シンポジウム『テネシー・ウィリアムズのアメリカ』で報告する機会を得て、戦後冷戦初期の社会文化空間とブロードウェイ演劇・ハリウッド映画という主流の表象空間で作品が需要されたウィリアムズの政治性を検証し、大文字のブロードウェイ演劇としての認知を確保しつつ（すなわち中産階級の観客に、家父長制度の中での規範的ジェンダー秩序を撹乱した主人公たちが哀れに罰せられるカタルシスを供給することで冷戦期に強化されたジェンダー規範の表象をなぞる身振りをしつつ）、過剰なセクシュアリティの書き込まれたウィリアムズのテクストは、上演においてこそ複層的に観客に届いていたとの解釈を提示した。

（３）いっぽう、前衛演劇の分野にも目を向け、前衛演劇人が標榜した、リベラルな個人（主体）という主張を「文化的リベラリズムの芸術家」と名付け、68 年世代のオルタナティヴ演劇を経て、70 年代に出現した「イメージの演劇」等、個人の内部や思考の様式を追及した演劇を検証し、これらがフォルマリズムに向かう過程で、脱政治化した経緯を確認した。

（４）同時に、戦後のこうした表象空間における一連のフェミニズムおよびジェンダーパフォーマンスにも目を向け、冷戦期に強化されたジェンダー規範への対抗的な表象の模索が、主流とはなりえない空間に展開した経緯、およびそうした舞台芸術の身体性・政治性を検証し、その系譜を『パフォーマンス研究のキーワード』に執筆した。

（５）本研究により、従来の主流・反主流、知性・反知性、社会派・非政治的といった二項対立によって理解されてきたアメリカ演劇史における枠組みをいったん解体し、冷戦期に推進された文化政策を、その方便ともいえるリベラリズムをキーワードに再検討し、舞台芸術表象に、強化・推進、隠蔽、転覆してきたものを明らかにするため、具体的な作品を検証しつつ、ひとつの概念枠として有効であることを確認した。

（６）そのほか、冷戦期アメリカ合衆国の文化・芸術政策の全体像を把握するため、数多くある文化芸術（および学術）推進団体（政府関連の機構や団体、財団や協会）の活動等、国内外において合衆国政府が文化戦略として冷戦体制を強化していった過程を検証した。とくに、冷戦期に日本や韓国などのアジア諸国と友好関係を結ぶことで、太平洋以西の覇権を強化する外交政策をとり、外交的には日米教育委員会や日米友好委員会の設立などにより、アジアとの関係を学術・文化交流によって強化し、さらに国内ではアジア協会やアジア文化財団などアジアの文化を支持する団体の設立による文化交流の試みやアジア研究が推進された経緯を確認し、冷戦文化・芸術政策の国際的な影響関係をさらに考察する必要性が確認された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
①戸谷陽子、ニューヨークの都市空間と文化政策、「テアトロ」８０９号、査読無、2008、pp.17-19
②戸谷陽子、『道具返し』―バジル・ツイストの実験、舞台芸術 15、査読無、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター、2009、pp.144-151
③戸谷陽子、Tennessee Williams の政治性―セクシュアリティの表象を中心に、査読無、日本英文学会第 81 回 Proceedings、2009、pp.212-214

〔学会発表〕（計 5 件）
①戸谷　陽子、「冷戦期の演劇：ミラー、ウィリアムズの描くセクシュアリティの奇妙なねじれ」、シンポジウム『冷戦下の表象文化空間再考―国家・ジェンダー・イデオロギー』、アメリカ文学会東京支部、2007 年 6 月 31 日、慶應義塾大学三田校舎
②Yoko Totani、Dogugaeshi: Basil Twist's Experiments with the Traditional Japanese Puppet Theatre Technique、2008 Comparative Drama Conference、2008 年 3 月 27 日、Radison Hotel, Westside, CA, USA
③戸谷陽子、古典の条件 ―『わが町』に見られる普遍主義の検討、全国アメリカ演劇研究者会議、2008 年 6 月 29 日、 エスカル横浜
④ Yoko Totani 、'Misperforming the Avant-garde?' PSi # 15 (Performance International #15)、2009 年 6 月 26 日、University of Zagreb, Zagreb, Croatia
⑤戸谷陽子、Tennessee Williams の政治性―セクシュアリティの表象を中心に、シンポジア第八部門『テネシー・ウィリアムズのアメリカ』、日本英文学会第 81 回大会、2009 年 5 月 31 日、東京大学駒場キャンパス

〔図書〕（計１件）
①高橋雄一郎、鈴木健、山口順子、菅靖子、戸谷陽子、吉田真理子、世界思想社、『パフォーマンス研究のキーワード：批判的カルチュラル・スタディーズ入門』、（「第 5 章ジェンダー」および「トピックス：アイデンティティ、ジェンダー、フェミニズム」、pp. 206-243 担当、総 282 頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
戸谷　陽子（TOTANI YOKO）
お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・准教授

研究者番号：30261093

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し